

眞生

第一卷二十號

○全心の祈り

□如何なる場合にも向上ならんとする自己の本心が最高理想の絶對のミオヤに歸命するところそこに自己本心の祈りがある。

□而して是の本心の祈りこそ唯一如來に歸る人生の白道であつて如來の本心に自己の本心が一つになる唯一の方法である。

□而して如來の本心は即ち自己の本心である、如來を彼地におき自己を此地におくは即ち如來と自己とを二つに見てゐる間であるが、一度如來に南無した當體は生佛不二の姿である。

□如來の外に我なくば我は即ち如來でないか、而して、如來の外に自己の本心が何處にあらう、如來の本心こそ即ち自己の本心である。

□而して此の本心こそ如何なる場合にも如來を離れぬ自己の本心であつて、此の本心が如來に南無するところ、そこに全心の祈りがありそこに全心に念佛がある。(念)

眞 生

車 中 に て

目 次

- 車中にて 土屋 觀 道
- 信行の念佛^(註) 中井 常 次郎
- 醒ませ人々 演 阿 彌
- 懺悔錄 本間 榮 吉
- 眞生命の高潮
- 「吾朋」便り

運命の忍従

▼曠劫より以來人間に課せられてゐる業の定めが正命精進を呼び起す尊い力である事が嬉しく感ぜらる。而し生活事實からは背反矛盾不調和不統一の寂寞が直感さるる時はうらめしい呪しいものになつて来る。

▼苦惱と悲哀とを噛しめて行く。運命の忍従の中には涙の雫に光つた愛の燃焼がある。そこに殉教者の絶叫あり自由人の十字架ありどん底からの法悦がある。一切の前に跪いた全土の勝利者である。

▼正しい人は苦しむ、正しい人は淋しい道を歩まなければならぬ。偽善者に傷つけられて泣く乙女のように、泣きながら砂漠の中に自分の心臓の鼓動を静かに数えるばかりである。

▼運命の忍従は沈黙の叫びである。涙に凝結した愛の廻向である。我に克ち、世に勝ち、佛に生た自由人の生の力である。

▼幸福や喜悅の與えらるゝ時恐しい様に感ぜらる。けれ共それを拒もうとするのではない、苦惱と寂寞と悲哀とを凝つと噛みしめて、静かな足どりで歩みを運ぶ時力強く平生がある。(顯)

「あなたは宗教をおやりですか」

「ハイ、一寸興味を持つてゐますが」

「此頃は宗教思想が全く流行して來ましたね」

「エ、そうです、キリスト教思想のものに次で親鸞思想のもの、此次はニヒリステイックなもの禪的な、或は法然思想などが、それからそれへと起つて來るでせうよ、何と云つても來たるべき時代を風靡するものは中道思想、無我思想でせう、東洋宗教哲學の思想が世界を支配するのは遠き將來ではありませんでせう。」

「私はK氏の「積極道」に共鳴しましたが貴兄は付うですか」

「ハア、私も充分あの考へには賛成ですが、それよりもO氏の無礙無作の任運道を寧ろ採りますね」

と言ふ會話が二人の成年の間に取交はされてゐました、二人の取扱つゐたものは人類思想の至奥に徹する偉大な問題でありました、が此等の人々には宗教は一つの掌上の珠であり、眼前の花の如く咲き來り散り去つて、但に鑑賞物に過ぎません。「それでは、あなたの宗教は？」と問ふたとき、自懷中無一物なるに駭くか或は誰々の考へと一つてすと他人の懷勘定を擧げる様な人です。

宗教は飽くまで自己の要求より發し、自己の要求を充す可きものでなくては自己のものではありません、概念や智識の貯へが貪くとも、懺悔、歡喜、願求の一つ一つが事實の上に力であり、生命であるとき宗教的に豊かな人である。そして如來様に對して醒めたる靈性と、人格と生活の上に萌した榮光とは永久に何人からも奪はれぬ財産です、直に自ら省み佛より眺められて恥かしくない満足さに充實せやうと進む裡に、宗教人としての本當の悦びと味ひとがある。(趙子)

行信の念佛(四)

土屋觀道

只だ念佛稱名といへばとて必ずしも信仰が供ふものとはいへぬ。之れ已に念佛稱名には必ず三心を具すべきであると殊更に注意せらるゝ所以であつて、若し稱名が如何なる場合でも必ず三心を具するものならば何ぞわづらはしく念佛には三心を具すべしといはれる必要はない。然るに世人往々にして眞實の念佛を忘れて單稱念佛の形式に墮するといふことは少しでも眞實に生れんとして道を求むる人々の到底満足し得べき所ではない。従て此の形式の念佛にあき足らない結果として信仰心のみを主とする一派が現はれて來たのも無理ないことである。信なくて申す念佛が何て眞實の念佛であり得やう、信の上に立つた念佛であつてこそ眞實の念佛であつて、未だ如來を信せずして、申すといふことにのみ力を入れる念佛は夫丈自力の方へ心をはこぶことである。而も南無といふは如來に對する歸命である即ち如來の願力を信じて其の勅名に順ずるのが南無である。而してどうして南無することができるといへば如來大悲の本願のいはれをよく聞かしていたゞけば心自から如來に歸する心となるのである。如來の本願に自分の心が疑い晴れる所そこ自から如來に南無せざるを得ない心も起きて來る。されば信心も自力をはげんで起しうるものではない、自力では起さんとしても起すことのできないのが吾等の事實である、若し吾等の力で信心を起すことができるなれば誰れでも直に如來の本願を信じ如來の淨土に往生せ

んと心も起し得べきであらう。然るに自分の力では其初め如來を信せんとするも信ずる心になれず、淨土に往生せんと思ふ心でも自分の力では起つて來ないではないか。されば念佛の信仰は之れまた單なる自分の力で起し得るものとはいへぬ。むしろ如來の衆生を救けんとの大悲が本願となり念佛となつて吾等の心に到徹していたゞく所にのみ初めて吾等は如來をも信せられ、念佛もはじめて申さずにはいられないやうになるのである。而かも其の本願の念佛は如來の大悲より出でたものであつて、如來の方から私共に向けてのやるせない思召である。故に私共は其の謂れを聞いてよく案ずれば如來の身から救けてやるとの仰せであつて、我等から勝手に如來に救けて下さい、下げて下さいと無理にいつまでもするものではない、若し先方で救けてやらぬといふことならば是非にも救けてもらはねばならぬから救かるまでは何偏でも救け玉へ救け玉へと御すがりもし、又御祈りもすべきであらう。乍然已に先方より一念でも我を頼まんものは皆悉く救つてやるとの御誓いであつて、いはゞやるせないミオヤの心がむしろ先方から救はれてくれ救はれてくれとの御願いである、さればたとい一念も此の如來の御心が私共の心に判らせていたゞく上からはたゞ其大悲のかたじけなさに感泣して其の御心を信受せずにはゐられないのである。この時一切は如來に任かせられ、凡ての苦難も除かれて、何等の不安も何物もないのである。故にその後の念佛はたゞ喜びと感謝の心に任かせて出づるまゝに申せばよいことになるものとより念佛の教などで往生するのではない、一念の念佛に不足なれば百念千念皆これ不足の念佛であらう、一念にして不足ならずば何ぞその後の念佛を要しやう、而かも是の一念は本願を信ずる信の一念であるから彌陀の本願を信ずれば是信こそは金剛不退の信である。而も此の如來の本願が私共の心に到徹

していたゞく時私共には如來の信行も自からこちら同向していたゞいたことになるのである。然るに未だ此の信なくして、此徒らに念佛のみを勵む心あるは如來の本願大力を信賴する心の無いから起る心であれば之こそ自力の念佛であつて、念佛を勵まねばならぬといふだけの自力の心がまだ残つてゐるといはねばならぬ、故に此の勵む心に力を入れれば入れるほど他力を頼む心は逆になる、かくて遂には本願力にすぎるの念佛でなくなるのである。乍然私は信のみで念佛はいらぬといふのではない、否むしろ此の信の上よりして初めて眞實信仰の念佛となつていふのである。即ち他力の念佛は一切をミオヤのはからいなりと信受して如來に一切を歸するが故にたとい勵む所の念佛がミオヤの大悲に打つがる心の勵みが念佛となるのであつて、之をよくよく案すれば如來の大悲に催されて勵まされていたゞくのであるといふ心になるが故に若し此の心に住さゞれば如何に自から勵みつとむるもそこには一切の自力念が入らない、一切が他力を仰ぐ念佛の中の生活となるが故にすべてはミオヤのお計らい、如來大悲の寵恩として感ぜられて來るのである。従つてそこには自力の心寸毫もないからして之を他力の念佛といふのである。此の信心によらない念佛は如來を信すること淺きが故に同じく稱ふる所の念佛も疑信多く心自から不定にして又不安の思ひがある故に口には稱名を稱へても心が心から念佛でないことになる。従つてなす所のこと皆雜毒の心から出たのであるから、又其の念佛も雜毒の念佛といふべきであつて、眞實の稱名とはいへないことになる。こんな心でどうして如來の彼國に往くことができやう。故に稱ふる念佛も信心をこそ本とすべきである、念佛申すも信心淺くば詮ないことではないか。乍然之を以つて直に稱名を生因とするのではなくて、信心をこそ生因とすべきであるといふのではない。乍然私は此の言

葉の意味を靜かに味ふて見るべきであると思ふ。而て私は私の心の中でひし／＼とこのことで胸打たるゝの思ひがする、それは何故であらうか、もとより念佛を信ずるといふことも人が信ずるのでなく、自分信ずるのである、人の力で信ずるかといへば人の力でなく自分の力で信ずるといひ度たい、乍然上求の如き考へ方によつて私共ははたして自分の力で佛を信じ自分の力で念佛を申すのだとのみ申せるものであらうか。此の一切の行持のよつて來たる原因を尋ねれば其の源を如來大悲に尋ねは入るより外に私共の考へうる力はないではなからうか。私共が念佛を信じ念佛を申すといふことも許より誤りではない人の力で念佛を信ぜさせていたゞくとか申させていたゞくといふならばむしろ自分の力でと申した方が私の心には直接である。乍然之を如來の本願に望むれば自分の力で信じ念佛を申すといふよりは如來の御力が私共を救ふて下さるために私共の心の中に顯はれてくだされたのであつて、之あつてこそ初めて念佛をも信ずることができたのだ如來の本願がなくばこうして私共が之を信じ又念佛を申すことができやう、否信ぜんとする心さへ自分には無かつた、否求道の心を起したのさへ、よくよく案ずれば如來大なる御計らいではなかつたか、否今日でも何一つ自分の力で絶對になしうるものがあるであらうか、と思ふとき、そこには無限大悲の如來の意光が光々として輝くのみである。之を相對的に見るならば確かに人が信じ人が申すので念佛ではなくて自分が信じ自分が申す念佛には相違ない、乍然之を如來の本願に望むればそのまゝが亦如來の御力によると見ることができではないか。如來を信ずるといふことゝ如來を信ぜさせていたゞくといふことゝは事實に於ては何等の異りもないことになる。乍然之を信仰の主よりして如來の自力により之を信ぜさせていたゞくといふことゝ自分の力により之を信ぜるといふこ

とは他力を仰ぐ心得に於て信仰上には大なる差異がある。若し之を普通にいふならば如來の願力によればこそと見れば他力と感じ自分が信ずればこそと見れば自力と感じ兩者の力が相合すると考ふれば半自力半他力（或は因縁和合）とも感ぜられる。此の三つに於て或は自力、他力、半自力半他力等の考の出でて來るのは又理の當然といふべきである。乍然之は宗教的實感にあらすして一種の因縁觀若は因果論的觀察といふべきであつて、宗教信仰の上からいふならば信せんとして信ずることのできなかつた私共が今や之を信じるといふよりも信せずにはゐられなくなつた心から見れば之を如來の御力であるといはずして何と云はふ。如來は私の知らなかつた以前から我は汝等の父母、汝等のミオヤ、我の他に汝を救ふものもなく又道もない我汝を救ふ、我汝を愛すとの慈愛と努力との中に私共を呼んでゐて下さつたのである。而かも此の本願のあることを私はさかしめられ、色々疑つた結果として遂に如來の大悲に頭が下つて、今や信せざらんとするも信せずにはゐられなくなつた。而て此のやるせない如來の御聲たるや生死に惱み罪惡に苦める私共には實に仰天の驚きである。古來幾多の聖賢は已に此の中に、疑雲も晴れて慈光の中に立てられてゐる。而して私共の念佛はむしろ此の如來召喚の御聲に驚かされ今や如來に引つけられた感である。私の力では佛を信じ念佛を申す心にはどうしてもなれなかつたのがほんとうであつて、此の外に私共の行く可き道もなく、尙此の外に私共のなしうべきすべてがなかつたと思ふ而て自分の力の及ばなかつたことはやがて自分の力の無力なりしことにまで氣付かされて來た、茲に於て、私共の心を如來に引つけるものは唯如來大悲の本願のみである。斯くていつしか如來の願力は私共の心に輝きいつしか私共は此の如來の願力を力として信ぜずにはいられなくなるのである。私が私の力

で願力を信じたのが本願力か私を信ずるやうになさしめ玉ふたのか私の力では信せんと努力してもどうしても信することの出来なかつた實際を顧みれば此の信心は如來の願力が遂に私をして信せしめ給ふたのであると解するより外はないのである。而かも此の時私の心は安らぎ私の心は喜び私の心は如來をあれがれ、私の心は反つて眞實の力に充つることを感ずるのである。之を如來の御力といはずして何といはふ。之に反して自分の力といふ心を混めれば反つて夫丈如來の願力を仰ぐ心のうすらぐを覺え、夫丈願往生の心にもぶり、努力すればするほど自から不自然の苦しさは胸ふさがるの感じがする。信仰もない稱名、申してさへゐればよいといふやうな念佛でどうして眞實の安心が得られやう申す方にのみ力を入るれば如來を忘れ、淨土を失ふ婆となる。單なる依法主義の念佛や人まね丈の念佛では私共の本心が承知せぬ、如來が夫てよいといはれるはずもないけれどもよしや夫てよいといはれても私の本心が承知されんでは仕方がない。この意味に於て信ずるといふこと否ぜられるといふところの念佛が如何に尊く我等の心底に奥深く響くとかといふことは思い半ばに過ぐるものがある。そこに他力の信心を主として自力の稱名を排することにもなる。而して之は如來の大悲に耳傾け眞信仰の謂れを聞かんとするもの、當然來るべき道ではないか、未だ信仰なき者が口稱の一行にのみ力を入れて勧められる時、どうして眞の念佛になり得やう、茲に於て稱名をすることを排斥して信心本位に心を傾けるといふことは熱心に道を求むる人々のどうしても來なければならぬ自然の道ゆきではなからうか。

乍然斯くの如き状態になる迄には私共の努力は全々いらないといふのでない、是の稱名と信心とはしかく相異なるものではない。本願の稱名が單なる稱名でないことは彌陀の本願念佛なる限り、信心なき

單稱の念名ではない。されば本願の念佛とは信心を離れぬ上の念佛であり、又信心とは念佛を離れぬ上の信心ではないか。即ち佛の本願が信ぜられ、其の佛の本願に相應すべく如來の御力にすがる歸命本願の念佛である。如來の大悲本願を信する丈けが所詮でなく、其の本願が信ぜられた上からはそこに自から起り来るものは至心信樂欲生彼國の心である。此の心が即ち念佛の三心である、而して此の三心が成就する爲めに如來に南無して止まぬ念佛となり之が南無阿彌陀佛と如來に御すがりする念佛が謂所本願の念佛である。されば此の念佛を離れてどこに如來の本願があり、どこに眞實の念佛があらう。本願の念佛は此の信心の念佛であつて信心なき稱名では決してないのである。一度も眞實に此の信仰には入つた上からは愈如來を中心として如來と等しき境地にも達したいとの欲生の願心は色々の悶惱の起る中からも作佛度生の理想のもとに眞實稱名の念佛となるのである。丁度炭が火に會ふて火となる如く、私共も亦佛に會ふて佛となるべきものであれば夫までは常に如來を慕ひ如來を離れず全心彼の國に生ずべく無限の望みと力とに充ち満ちたる人類の理想の大業として念佛稱名の一行が開けて来る。されば信行の念佛は如來を中心として如來に歸命する念佛であつて、そこにはいと深き人類生活の反省の上にミオヤの大悲を體現せんとする生命道ともいふべきである。(終り) (二一、一四)

醒ませ人々

中井常次郎

蒔かぬ種は生えず、草を取らずばお米は良く育たぬ。金鑛を精鍊せずば黄金を得ず、綱を鍛えずば名刀を得られぬ。宗教も亦、然り。

如來の光明は十方を照せども、煩悩の炭に火を放つて熱を起し、光り輝くにあらずば、凡夫は醒めない。されば經に「如來の眞身は常住なれども衆生を利益せんが爲めの故に、生死の肉身を現す」と

常にはだして歩まば足の裏皮は、雪駄の皮の如く丈夫になるべし。其の實例を台灣の生蕃に見る。斯くの如く強くなるべき足の底皮を保護する心にて、人は輕き桐にて下駄を造らせて履き、空氣草履、靴などに意匠をこらし、食しきは年に數十錢より富めるは數十圓を起すの投資をなす。帽子も同様。頭足然れば其の中間部を包み飾るの苦心と投資は實に少くはない。

有爲轉變、露命旦夕を知らず、今日の紅顔、明

日の白骨となる此の衣架、食糞に力を入れることに忠實にして熱心なれど、不壞常住、永生なる法身を悟らんが爲めに努力し、心の糧を求める人は少い。たま／＼稱名を信すと雖も眞に本氣ならざるが如しである。

釋尊御在世の當時、一度の金口說法を聽きて發心し、妻子、財寶を捨て、出家得道した人の多かりし様は、佛弟子傳を開けど思ひ知られる。然るに今日、佛法の宣傳使たる僧侶に供養し、心糧たる聞法、讀書に投資するの少きは、衣食住費と比較にならず。是れ僧侶の俗化、腐敗、書物の贅言、無價值なるを證明するものなれど人々の信仰の程度を伺ひ知ることも出来る。

吾人が商賣に奔走し、家事に心を奪はるゝ如く安心問題に青くなり、良師を求めて得ず苦悶する人の少きは人生に宗教の必要、缺くべからざるを知らぬからである。西賢が「人と動物との異なるは宗教の有無に在り」と云ひ、古聖が「人生は念佛せんが爲めなり」と宣言されし此の至言を誠なりと信じえない爲めに僧侶は墮落し、信者は出來ず

人々は争ふて暗に顯滅するのであると思ふ。
されば僧俗共に協力し、一團となり、一個體となつて、僧侶は専ら法施し、俗は財施し以て、眞の文化、不變の靈福を受くる爲めに、聖旨を奉戴し自他共に利するやうに努力したいものである。

(大正十一年十月廿五日)

懺悔錄 (十)

演 阿 彌

おゝ私の救ひ主に在ます私の如來様よ、私は大正八年七月三十日正午頃、中央線の汽車の窓から外の——何となく男性的の感じのする景色を眺め乍ら例に依つて憶想を續けて居りますと、不圖私の耳に

「目的を達するにはどうしても手段を撰ばねば駄目ですね。」

と云ふ言葉が響きました。見ると三十位の青年が五十七八にもならうかと思ふ人に話かけて居るのてした。二人共商人の様です。私は常ならば何と

も思はぬ此言葉が異様に高く鋭く心耳に響いたので思はず微笑みました。

「然様だ。私は私の目的の爲めに今は正しい手段が撰ばれたのだ。私の前途は光明に輝いて居る。而して私の第一歩は確實なる足取りを以て正に踏出されて居る。嗚呼思へば實に愉快である。」

切れ々々にこの様な事が思はれて微笑まれますに居られませんでした。

三時頃、上諏訪に上車してS上人と共に頗る滑稽の風體で荷物を肩にエフチラオツチラ唐澤山へ登りました。

唐澤山ではT様が御一人で待つて居られました。翌日から毎日三時間宛四回純粹御念佛丈で御話は休憩時——夫れも食事の時と就眠の前と丈ですが——丈で主として見佛三昧に就ての話斗りが交換されました。

此一週間に於ける私に就ての概略を申し上げますと、第一日は雑念だらけ第二日は大分余念が無くなりました。此晩で御座いました。夜分皆様が御寝みになつてから薄ぼんやりして居る燈火の下で

——あとで氣が付きましたが皆んな寝ませうと云ふのでランプの心を引込めてあつたのでした——

或物件の手紙を認めて漸く十一時頃に床に這入りました。何氣なく蒲團の上に座ると一面の花毛氈です。

「オヤ。美しいな!」

と思つて手で撫でますと蒲團の模様は別にぼんやり見えます。而かも花毛氈は透き徹る様になつて居ます。

「變だな。」

横になつて掛蒲團を被りましたが、矢張り一面の花模様です。

「例の幻覺だな。」

と思つて無理に寢て仕舞ひました。第三日は余り雑念が湧きませんから

「之は甘いな。」

又しても直ぐ之です。昨夜の幻覺が歎ひをして居るのです。

「之は甘いぞ。今に佛が見るだらふ!」

私は一生懸命になつて「如來見え玉へ」と思ひ續

などは知りません。私自身

「私は善人だ。」

と思ひ込んで居るのですから

「むしろ如來様の方が罪人だ。」

とさへ思ふ程です。まさかそんな低級な冒瀆な事は口外しられませんか黙つて居りましたがもう夫れからは涙も引込んで仕舞ひました。四日目の晝頃Y上人が東京から見えました。私は何だか氣拔けの様でした。それでも五日目に少し元氣が出たのでS上人に伺つて見ました。

「御指示の通り一念一念佛見を王へと思つて御念佛して居りますが、何の變化も起りません。何が缺けた處があるのでせうか。」

「夫はいけません。佛見を玉へと思ふのは初一念でありませう。又は時々新たに呼び起してもよいのですが、一職毎に見え玉へ々々々と思ふのでは何時しか機械的に「心の言葉」になつて仕舞ふから駄目です。之は余程研究す可き事です。古來の大徳方も之に就ては中々御苦心なさいました。徳本上人の秘密用心と云ふ事を御存じですか。」

「知りません。」

「此次辨榮上人様から承るとよいと存じます。また御念佛する時の態度などもよく見習つて置くことよいと存じます。肉體が精神に多大の影響を與へる事は判り切つた事です。」

するとY様は「以前に御上人からする時の心持ちを——南無とは煩惱に汚れた自分の方の事であり阿彌陀佛とは頼む御方でありませうから南無の煩惱を阿彌陀佛にと捧げる思ひで南無阿彌陀佛々々と申すがよい。かくすると念々に淨化されてアナタの御慈悲を體得する事——出來る——承つた事がありますが、まだ徳本上人の秘密用心とかは承つた事がありません。一體秘密とは妙な事を云つたものですね。」

「それは人間の弱點を利用したものです。心理上秘密と云ふと尙更に間度いものです。たやすく教へられたのでは捨てられ勝なものですが秘密にしてあるものを無理に聞き得た處に深く強い印象がありますから忘れて仕舞ふことはありません。然しよし夫を聞き得た處で我物になるか否やは判

りません。自分で色々工夫して見ないでは中々我物とはならぬ者です。般舟讃にも念佛に工夫なしと云ふ如く此人は化度し難しとあります。自分で工夫するのが肝要だと思ひます。」

私は迷つて仕舞ひました。佛見を玉へ々々々と云ふのが「心の言葉」になつて仕舞ふと云ふ。

「或は機械的にならぬとも限らない。自分では其の思ひが運ばれると思つて居つたのだが事實何等の靈應も起らないし、又S上人は心理學に就ては造詣が深いのだから云はるゝ處に間違ひはあるまい。機械的になつて精神が空虚になつたら成程駄目であらう。之は工夫して見ねばならぬよし。之からが本當の出直しだ。」

私はかう思ひましたから夜中に一人でやつて見ました。自分の心を試めし乍ら靜かに々々工夫して見ました。一人でやつて居ると聲は四方に反響して而して更に私の處に返つて來ます。瀧の音はドドツドドツドドと耳元に響いて物すごい様です。庫裡の座敷の方ではまだ御三人が起きていらつしやると見えてコト々々と御茶を呑む音がし

ます。私の耳は随分鋭敏になつて自分乍ら段々物凄さと呼び起して仕舞ひには工夫處ではなくなりました。殊に晝間見た彈誓上人の繪傳の中の化物なぞの事も思ひ出されて來ます。

「工夫と云ふものがさう直ちに成就するものではない。容易く最善のものが見付かる道理はないのであるから、之は早く歸郷して家で氣長に研究するより外に手はない。」

こんなと思ひまして大薫香一本でやめて仕舞ひました。六日目も色々工夫して見ましたがかうなると五里霧中ですから支離滅裂と申しませうかさつぱり物になりません。此夕度々S上人からも御囁を承つて兼ね／＼懷かしく思つて居りましたY市のU様が御見えになりました。名刺を出して心から御挨拶を致しましたが

「から申しては悪いけれども御僧侶方は大概自力念佛で、成つて居ない人が多い。たまたま信仰を得たと云ふ人でも慢心と云ふ奴が首を出して來る奴は困まつた者だ。」

何だか私の事をすつかり云ひ當てられて居る様

で薄氣味が惡う御座いました。
「オヤオヤ。私は自力かも知れない。然し自力とか他力とかそんな穿索をして居る暇は無い。慢心、夫れもあるでせう。けれども今は惱んで居る眞最中で慢心など云ふ余祐は少しも無い。」

心の中では反抗の聲で叫びました。七日目も朝から一日正しく御念佛がありました。休憩時はU様が一人で御話して居られます。黙まつて伺つて居ると何となく引付けられて愉快になります。然し私の御念佛はもうすつかり打ちこわしになつて居るので唯だ早く家へ歸へつて獨り靜かに工夫して見る事と云ふ丈が思はれて如來様などは問題外の者につて仕舞つたのでした。八日目の朝は御禮の御念佛を少し致しましてS上人と私の二人は御三人を山に残して町の方へ下りました。

龍頭蛇尾に終つた此七日間、私は何を學んだでせうか。噫々大恩寵に在ます如來様！。

（此歸途汽車の中で、「死に面せる恐怖狼狽」と云ふ自分の醜さ弱さを見せ付けられてツクツク自分の拙さの本當の者を知りました。之に就て

も色々申上げたい事があります。が割愛致します。）

眞生命の高潮

本 間 榮 吉

私達が偉大なる不思議として驚異すべく、靈妙なる創造として讚歎すべく、幽遠なる慈愛として禮讃すべく恒に意識するところのものは私達の心奥に囁く神の觀念所謂如來を仰ぐといふの秘鍵を賦與されてゐる事がそれである。

例へしヨベンハワーが人生の本質と存在の意義とを意慾の果てしなき無限なる發展なりといひロツクが宇宙の本質的私達の認識可能を白紙に印刷された活字であると稱へたりとしても私達は依然として本質の中に存在しながら直感と反省とを持つ、所謂興奮と感激と信念とを離れて満足し得ない。

私達は本質と見るところの實在が普遍なる妥當的當爲に於てのみ眞實價值が生すべきである事を

識る時そこに私達が願求して息む事なき眞生命の感激的躍動を認めずにはゐられない、其眞生命こそ不斷無量に輝く永劫を一貫せる慈愛の光明であり無限の禮讃でなければならぬ。其光明こそは應て私達の生命の根源となり生活の奥儀となる。

私達が持つ信念は此光明に於て一切の根本原理を求め、最高本然に還元し眞實生活を演繹する。

故に私達は此眞生命の一畫線上に立つ時のみアリストテレースが主張せる所謂道德の本質的に歸納した一切に逼通する識見を可能し得る。

私達は恒に興奮と感激と顫律とを無視し、没却せしめて賦與されたる慈愛の秘鍵を握る權利を有し得ない。神への信仰は眞善美の絶對調和でありリハインされたる感情の極緻であるからである。

私達は理通と合法的範疇とを尊崇する。理性の範疇の明晰を尊ぶ。所謂カントの哲學を敬愛するけれども哲學的理性のみの世界は餘りに幻想的であり明滅的であり瞬間的定律に固定する。いつも論理は假設の本質の探求であればである。

私達は又順應した時代の生産として一切の科學原理を尊重する、所謂アインスタエンの相對性原理の偉大さを憧憬する。けれども私達は絶對原理の存在を否定し得ない徒輩である。例へば2と2との相對は4を成立せしめるとしても4其ものは2と2と1と1と1と1とを相對せしめずとも4は依然として絶對存在であるからである。

私達は直角に於て成立する直線其ものが二點間だけにのみ與へる眞理である事を信するのみならず無限に延長せしむる直線其ものの眞理性は絶對に破壊し得られざる事を信する。

开は無限に延長せしむる直線が圓形なる地球上に於て成立せずといふは假設を二重し三重したる論理上に云ひ得るのみであるからである。

私達は以上の意味に於てガリレイやニュートンの物理法則を尊敬すると共にア氏の相對性理論を否定するものではない。しかしながら絶對性存立の本質的事實を肯定し、それが尊信する努力と發展的向上とを専念して息やない。

私達は一切を集約して茲に宇宙人生の本質的事

實を求むる。それは理性と感情との絶對融和其ものから表出さるべき絶對『信』其ものの世界である。私達は確く眞理を掴む、眞理は又私達の總余を掴んで離さない、そこに存在の因果關係行はれ永久性のポスピリターが躍動する。即ち胸裡の迷夢自から霧降り皎たる明月の心境打開したる。

私達の眼前に展開し廓大し横溢さるところの偉大であり不思議であり微妙であり讃歎である。そうした世界は深淵なる慈愛を意識する神への即ち如來への信仰と禱祈とに依てのみ眞實の意味と不變の價值とを持つ。

私達は信仰の極純に於てのみ時間と空間の觀念を超越するからである。

年賀申込の廣告

(十二月十日迄)

新年號は装禎も内容も更に新装を加へて發行いたします。

●地方各位も年賀狀の代りに眞生誌を利用して御名前を申込下さい。

無料でお戴せいたします。

●特價提供として一部あて、十部まで六錢、五拾部まで五錢、百部以上四錢五厘の割で差上りますから之又御申込願上ります。

(編輯部より)

吾が朋便り

□清水中村辨康様より

私の爲めに夜もすがら御話下さいまして嘸ぞおつかれでございましたでせう。乍然よもすがら語りあかすと云ふことは私には水遠の記念であります、今後私達の上に如何なる開展があるか何だか非常な或る豫期せらるゝ喜びを感じずるは居られません。たとひ今は世に入られずとも百年千年の後に正に光明輝くべきですが少くとも尙十年の後一大驚異が来ないとも限りません、私は隠忍も止むを得ない事と存じます。名古屋伊勢美濃の皆様へよろしく御傳へ下さいませ。

□伊勢 川村二郎様より

次に私は今度は以前にない靈應

に觸れさせて頂きました而て如來様に對する歸命の念は益熾烈にならせて頂きました。また上人様に對する敬慕の念は愈々濃厚になつて参りました事を切に感ずるのであります、御仰の通り人生向上の道程にありますれば益自己修養に奮勵し併せて慈光宣傳に努力いたしますことを誓つて置きます。

□京都 中井常次郎様より

眞生誌に投稿せよとの命せ有難く貴紙を汚さぬ様に御言葉に従い度う存じます。私は目下徳永氏方に厩介になり居りますが宅は今春和歌山の自宅に引き越しましたから彼地へ御出陣の切は何卒御立寄り下さい。

□三重縣 森本源之助様より

如來の大悲と御上人のいや深きみ情により開れたる法のむしろあ

ゝ私共罪の子の如何にめてたくも記念すべき三日間でございましたでせう、別時三昧會は當時に於ていまだ初めてのこと計られぬ人の心も如何かと考慮もいたしました。が此眞理此よき教へに隨はぬ凡夫でなくて何といたしませう。其後會員も續々參集いたし新舊總て廿二名榮照寺で念佛してゐますミオヤの聖旨に違せないやう一層力をこめてゐます。

□岐阜 圓心寺様より

本日は誠に妙なことにて行けなことを思て念佛いたしました處自分乍らに程よく念佛が通りまして久し振りにて心地よく南無の處に阿彌陀佛の御加護がある如く感じ入り嬉しく尊く喜入りました。此頃は妙に自己の罪惡觀が口より出てゝ耳に入り心となると共に念

佛となり其の念佛となる時妙へなる尊き感じを益々見出すこと念々厚くなるを感じます。

□多度 水谷圓超様より

久しう御尊顔を拜せず去月末より病床の身は御慈悲の導きの嬉しき勿體なさになゞ先立つは歡喜の涙のみにば

□京都 恒村夏山様より

秋が來ました澄みきつた気分は私共を透徹した思惟の世界にまで導いてくれます然るに私等の過去の記憶は遊墮と苦悶との外に何等の收獲ももたらして居りません。私は心から懺悔しなければなりません。

□京大 三枝樹正道様より

上人の側にある間は別として離れは又不知不識の間に熱のさめゆくのをしみ／＼と實感しつつも其

の方へ傾きゆく自分を眺めては入御佛の慈悲を心から喜んで居ります。あかしな云い分ですが私にはかゝる淋しい自己を見出す時ほんとうにかゝる我身をも救い給ふ如來のお慈悲が喜ばれて參ります

□桑名 十念寺様より

上人よ拙寺に御來錫下さいまし

た事を眞に私は感謝いたします、願くば斯くして各地に於ても何卒一寺に止まらずして各寺に御出て下さいよ、私は今回上人の御來錫によりまして凡ての疑いも氷解し

一家悉く喜びに充たされました事を心から感謝いたします、未だ如來の靈光に浴する實感は不能と雖も確信して進むべき道を得ました事及家族の全部までが少しなりとも變りました事は誠に有難き幸福であります。

▼編輯室より

□本誌廣告にありますが様に新年號は内容を更に充実したいと思ひますから讀者諸姉兄の御寄稿下さいます事を切に希望いたします

□毎月の發送は特志家の援助を得て居りますので發送人の代る處から時々發送上の間違を生じますので皆様に申譯のない事と存じます充分氣を付けますが若し未着の場合御償促下さいます様お願い申します。

振替口座東京四七貳八八番眞生社

大正十一年二月二日第三種郵便物認可

大正十一年十二月一日發行毎月一回二日發行

定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓

東京市芝區芝公園第十四號地九番

編輯兼土屋觀道

發行人

發行所眞生社

東京市外西巢鴨町二七一二番地

印刷人原子廣宣

東京市外西巢鴨町二七一二番地

印刷所無我山房印刷工場